

研究ノート

ソーシャルワーク演習（専門）における事例研究の授業展開について

櫻 井 美帆子

星槎道都大学研究紀要

第4号

2023年

研究ノート

ソーシャルワーク演習（専門）における事例研究の授業展開について

櫻井 美帆子

要約

ソーシャルワーク演習（専門）は、習得したソーシャルワークの知識や倫理に基づいた具体的な援助について理解を深め、次年度のソーシャルワーク実習につなげる目的の科目である。グループで意見交換や議論を行い、互いに刺激しあい複眼的な視点を養い、自己覚知を深めるとともに、チームワークを学ぶ機会でもある。グループワークを苦手とする学生は少なくないが、能動的に参加するか否かで学習効果の差が顕著に表れやすいという特徴がある。演習内容のうち、事例研究は活気ある展開となる傾向にあるので、授業の流れや学生の反応等をもとに学習指導法について考察をする。

はじめに

ソーシャルワーク演習（専門）は、社会福祉士の国家試験受験資格を取得するための必修科目である。本学では2年生を対象に、通年で週に1回2コマ続きで授業を行っている。1年生から座学を中心に学んだソーシャルワークの知識や倫理に基づいた具体的な援助を実践的に学び、3年生の福祉実践の現場における相談援助実習へつなげる目的の科目である。

学生を10~20名のクラスに分け複数の教員で担当している。グループワークを中心に展開をするため、学生達は、司会、ファシリテーション、記録、発表というソーシャルワークに必要な技法についても体験的に繰り返して学ぶ。更に、絶対的な正解がない人間の生活について、自分の考えを持ち、それを他者に伝えなくてはならない。自分以外の学生のペースにも合わせなければならないので、グループワークを苦手とする学生も少なくない。しかし、能動的に授業に参加しなければ学習効果が得られにくい傾向が殊更強いという特徴がある。

内容は、自己理解、他者理解、コミュニケーション、面接、記録、アセスメントとプランニング、カンファレンス、評価と効果測定、事例研究等で構成されている。その内、事例検討の授業展開を通し、学習指導の考察をしていく。

1 事例検討のねらい

社会が複雑化し、クライアントが抱える問題が重複化、複雑化している中、ジェネリックソーシャルワークを実践できる力量を持つ人材の育成が必須となっている。そ

のためには幅広い福祉問題や対象に福祉実践ができる力を身につけなければならない。学生たちはその旨を理解できているものの、自身の関心が薄い福祉実践の領域について意識を向ける機会が少ないように見受けられる。様々な事例を授業で用いることは、幅広く福祉ニーズや対象に興味を持つきっかけにもなりうる。

学生たちは今までに習得したソーシャルワークの知識を活用しながら、事例について掘り下げていく。考察が深まるのにしたがって、自分の知識が表面的なものにとどまっていると気づくと同時にソーシャルワークの奥深さを知るのである。更に、事例検討では限られた情報の中から考察をしていくので、想像力が養われるのに加え、実践のために必要な情報を見極める力も身につくはずである。

配慮すべき点として、殆どの学生が19歳や20歳で、人生経験や生活体験が乏しい上、社会情勢や雑学にも疎いため、クライアントの生活や人生について想像が及ばない面があるので、適宜関連する情報の提供や助言が必要になる。

時に一般的な社会通念から外れていたり、社会福祉士の価値や倫理に反するような発言もあるのだが、授業参加者を傷つけたり人権侵害にあたらない限り、それを否定したり諫めたりしていない。人間の生活や価値観に絶対的な正解はないし、ソーシャルワーカーは、福祉専門職とのみ協働をするわけではない。他の専門職や地域の人々とチームで協働する際、メンバー各々の多様性を受容できる素養がなければ、良いチームワークの実現は困難になると考えているからである。加えて授業の場で自分の思いを率直に言葉にし、それに対する周りの反応を知ることから自己覚知が進んでいくと期待できるからで

ある。

2 授業の展開

使用テキスト：ソーシャルワーク演習教材開発研究会
「ソーシャルワーク演習ワークブック 第2版」みらい
(2013)
p155～p166

タイトル 子供の自己決定を支える

事例を学ぶ視点

①子供の自己決定を支えるために必要な支援は何かを
考える。

②子供の生活上の問題（いじめの問題）に対してソー
シャルワーカーとしての支援の方法について考える。

事例の概要

クライアントはA子（女、小学6年生）、小学5年生
の時、父親による母親へのDVが理由で母親と2人で母
子生活支援施設に入所した。入所後は特に問題はなく、
同じ施設の年下の子どもたちの面倒をみることも多く慕
われる存在だった。

しかし、夏休みの終わりごろからA子は大人が見て
いないところで年下の子どもに暴力を振るいだし、施設
内で孤立するようになった。

ソーシャルワーカーはA子と面接し、約半年前から
小学校で、クラスの女子から無視をされている状況を
知った。A子は「学校をやめたいが、やめられない。」
「担任に話せない。」と思いつめている。「母親に心配を
かけたくないの、いじめの事は言わないでほしい。」と
も言う。後日ワーカーはA子と再度面談を行い、いじ
めの具体的な内容や経緯を聞き出しながら、A子ができ
る複数の対策を一緒に考えた。

演習課題

①自己決定をするために必要な支援とは何か考えてみ
よう

②A子がいじめの問題に向き合っていく場合に、援
助者はどのような支援ができるか考えてみよう

以上をもとに事例研究を行う。テキストは、手段的事
例で研究するスタイルであるが、授業では固有事例の視
点も加えながら展開している。

1) テーマと視点の確認

教員の働きかけ：クラス全体で意見交換する。

①子どもの自己決定の意義についてどのように考える
か。

学生の意見（一部抜粋）：「子供にも人権があるから自

己決定する権利がある。」「大人から決められたら、やる
気が無くなる。」「自己決定をしても責任が取れないから、
大人のいう事を聞く方が良い。」「子供は、気分が変わり
やすく自己決定した内容に容易に揺らぐので、子供の意
思を100%真に受けられない方が良い。」

②いじめについてどのように考えるか。

学生の意見（一部抜粋）：「いじめで受けた傷は簡単に
治らない。その後の人生にも影響する。」「あつてはいけ
ないのだが、現実として無くなることはない。」「いじめ
る側もいじめられる側も経験がない人はいないはず。」

学生の反応：挙手し発言をする学生はほぼいない。教
員の指名により発言していく。この事例はクライアント
が小学生なので、自分たちが経て間もない世代なので意
見が出やすいが、クライアントまだ経験をしていない世
代の場合は、イメージが浮かびにくい様子で意見が出
にくい。

2) 事例の読み合わせをする。

教員の働きかけ：読み合わせの前後に事例の内容を要
約して伝える。

学生の反応：読解力が身につけていない学生の場合は、
事例を1回読んだだけでは、あらすじがわかる程度に留
まりがちだが、前後に要約を加えることで、内容の理解
ができる。

3) 現在利用している社会資源の概要を理解する。

教員の働きかけ：事例の舞台となる母子生活支援施設
の法的根拠、提供しているサービス、利用対象を説明後、
施設や利用者のイメージの喚起と社会情勢を意識できる
よう、母子生活支援施設に関する新聞記事のコピーを配
布し黙読させる。

学生の反応：母子生活支援施設について初めて知る
学生が多いが、特に関心を持つ様子も見受けられない。

4) A子のパーソナリティについてクラス全体で意見交 換する。

教員の働きかけ：クラス全体に質問する。

①小学6年生の生活や発達の状況。

学生の意見（一部抜粋）：「行動範囲が広がる。」「自分
を子供とっていない。でも、大人ともっていない。」「異
性を意識しだし、同性同士のグループで遊びや行動
をする。」「女子の方が見た目も中身も大人っぽく、男子
の方が幼い。」「思春期に入って体も大人になってくる不
安定な時期。」「人の目が気になってくる時期。」

②A子の人柄について感じたこととその根拠。性格や
行動についてネガティブな意見は、出した後ポジティブ
な表現に変換する。

学生の意見（一部抜粋）：「一人で抱え込んでしまう。＝自分からSOSを出すのが苦手。根拠は暴力が無ければ大人はA子の悩みに気づかなかったから。」「大人の顔色をうかがう。＝空気を読める。根拠は、父親に怯えて育ってきたから。担任の性格や行動の観察をしているから。」

学生の反応：挙手して発言をする学生はほほいしない。指名により発言するが、事例に記されている記述そのままの発言内容の学生も少なくない。

5) クライアントシステムを整理する。

教員の働きかけ：クラス全体で黒板にエコマップを1つ作成する。学生を指名し、出た意見を教員が板書していく。各社会資源とクライアントの関係性は学生によって捉え方が異なる場合は、議論が進むことで変化する可能性があるため、双方を表記する。

学生の反応：事例に記されている以外の社会資源については、ヒントを与えないと思いつかばない場合が多い。

6) 事例を検討する。

教員の働きかけ：①グループでA子が年下の子どもに暴力を振るう理由について意見をまとめ発表するよう指示する。

発表内容（一部抜粋）：「極限まで追い詰められて、自分をコントロールできなくなった。」「父親の気質が遺伝している。」「幼いころから父親が母親に暴力を振るう場面を目にして育ってきたから、暴力に抵抗感が少ない。」「自分より強くて大きい人には暴力を振るわないのは生物の本能。」

学生の反応：A子を否定したり、裁く意見は出ない。

教員の働きかけ：②グループでソーシャルワーカーの対応について良い点と疑問点を挙げ、発表するよう指示する。

発表内容（一部抜粋）：良い点は「A子が暴力を振っている場面を目にしても、叱らず理由を聞いた。」「A子が考えられるように誘導している。」「A子が煮え切らなくても、せかさずに寄り添っている。」

疑問点は「A子が考えた解決策で、仲良くしていた女兒の家の前で待ち伏せをする、という策は頼みの綱である女兒からストーカー扱われ、嫌われる確率が非常に高いのに、それについて助言をせず、支持的な反応をしている。」「A子の主観による情報のみなので、学校から情報を集めた方が良い。」「A子に暴力を振るわれた子供たちへのフォローは行わないのか。」

学生の反応：良い点より疑問点についての方が活発な議論となる。

教員の働きかけ：③グループで②で上がった疑問点について、ソーシャルワーカーとして適切な対応を考えて発表するよう指示する。

発表内容（一部抜粋）：「仲良くしていた子供の家の前で待ち伏せをする策。」は一般常識から考えても論外なのでソーシャルワーカーは止めるべき。しかし、A子の自己肯定感が低い性格を考慮すれば、現在の状態でソーシャルワーカーが意見すると、それ以外の策を思いついても言えなくなってしまうかもしれないので、待ち伏せ作戦を選択した場合に意見を言う。

「学校から情報を集める。」は、問題が大ごとになって更にA子が追い詰められる可能性がある。しかし、客観的な情報もソーシャルワークに必要なので、A子に事情を説明して学校にコンタクトをとる。学校があてにならなかったら、教育委員会に訴える。

「A子の被害にあった子供たちへの対応。」は、どんな事情があろうと暴力は良くない。A子が暴力を振るった時にA子を叱らないと、年下の子供たちが、暴力を振るうのは悪くないと学習してしまう危険があるので、ソーシャルワーカーはその場でA子に注意する。ただし理由を聞いていないので、きつい口調とならないように気を付ける。その後A子に理由を聞く。

教員の働きかけ：④クラス全体に質問する。

A子はソーシャルワーカーに、母親に学校でいじめを受けていることを伝えたいほしい。と希望しているが、A子の希望を全面的に受け入れて、母親に言わないべきか。

学生の反応（一部抜粋）：挙手して発言する学生が増えてくる。最初は、「言わない。」という学生が多い。理由は「ソーシャルワーカーには守秘義務がある。」「言えばA子との信頼関係が壊れる。」「すでにA子は父親や担任という大人に幻滅している。ここでソーシャルワーカーが母親に言ってしまうと大人に対して心を閉ざしてしまう。」

「言う。」という学生の「こじらせて不登校になった場合母親から、娘の状況を知っていたにもかかわらず、伝えなかったことで問題が重度化した、と不信感を持たれる。母子生活支援施設のソーシャルワーカーなので、母親とも信頼関係は大事。」「被害にあった子供の母親は感情的になって抗議してくると予想できる。それに対しA子の母親も感情的に反応してしまう可能性がある。そうすると、A子親子は母子生活支援施設の中で孤立してしまう。それならば、中立的な立場であるソーシャルワーカーから伝えられる方が母親は冷静に受け止められる。」

「暴力を振るわれたことを年下の子供たちは、自分の母親に話すはずだから隠し通せない。」このような意見

を聞き、最初は「言わない。」と判断した学生は考え方が変化してくるパターンが多い。

教員の働きかけ：⑤グループでA子親子とA子の被害にあった子供たちへの具体的な支援を考えて発表するよう指示する

発表内容（一部抜粋）：早急にA子から母親に話そうに助言する。できればA子のペースに合わせたいが、その時期を待っていたら、被害にあった子供の母親から、A子が年下の子どもに暴力を振るった話が伝わる方が母のショックが大きく、母子関係に影響が出てくるかもしれない。そうなると、A子は学校生活の悩みに加え、母親との関係にも悩みが生じて今より辛い状況になる。

A子が希望すれば母親に打ち明ける場面を想定したロールプレイを行う。母親に話をする際に同席をする。

その後、被害にあった子供たちにA子が謝罪し伸直りができる機会や場を設ける。

7) テキストの演習課題にとりくむ

教員の働きかけ：グループで話し合いまとめ、発表するよう指示する。

発表内容（一部抜粋）：「演習課題① 自己決定をするために必要な支援とは何か考えてみよう。」について、子供は自分や周りを客観的に捉える力が未熟だから、面接技法を活用して気づきや思考の整理ができるようにする。思考力や判断力が大人よりも低いし、経験が少ないため視野が狭いからヒントや助言が必要。その際にはパターンリズムとならないように注意する。子供は子供なりのプライドがあると認めたくて支援する。

「演習課題② Aがいじめの問題に向き合っていく場合に、援助者はどのような支援ができるか考えてみよう。」について、A子が主体的に問題解決に向かえるような励ましや自信につながるような声かけをしていく。しかし、良い方向に向かう保証はないので、逃げ場の提案も必要。例えば、保健室の先生に相談してみる。保健室登校している児童もいたら、そこで新たな人間関係ができるかもしれない。と意見する。

最近のいじめの問題は複雑すぎるから、ソーシャルワーカーのみで援助をするのは難しいので、できるだけ他機関や他職種と連携する。

学生の様子：この段階以前で考察が進んでいるので意見がスムーズにまとまる場合が多い。

8) まとめ

教員の働きかけ：本日の議論をテキストに記されている「事例を学ぶ視点」と「事例の分析」に沿ってふりかえりをする。テキストのテーマ以外に、授業中の学生の

意見や議論の中で、ソーシャルワークの価値や倫理、原則、理論に該当していた部分について伝える。

例として、A子が年下の子どもに暴力を振るった理由の考察からは、ジェノグラムの意義や家族システム論の考え方が用いられていた。A子が提案した待ち伏せ作戦の弊害に助言するのは、ソーシャルワーカーの倫理の利用者の最善の利益に則っていた。母親に子供たちに暴力を振るったことを伝えるか否かでは、守秘義務のありかた、緊急性の判断という視点が活用されていた旨を伝える。

3 課題

①グループ編成について

学生のタイプは、以下に分類できるよう感じている。

ア 知識と気づきを備えている。授業態度は積極的。

イ 知識は有しているが、気づきが少ない。授業態度は積極的。

ウ 知識は少ないが、気づきが多い。授業態度は積極的。

エ 知識も気づきも少ない。授業態度は消極的。

オ 他者とのコミュニケーションが苦手。授業態度は消極的。

4月の演習スタート時には、学生達の差は大きく目立たないが、後期には差が顕著になり、学生間の関係性もそれに伴い変化が生じてくるよう感じている。積極的な授業態度の学生は、消極的な授業態度の学生の割合が多いグループだと、活発に議論ができないうえ、サポート役やまとめ役を担わざるをえないのが負担となり不満を持つ。一方、消極的な授業態度の学生は、積極的な授業態度の学生に気圧され自信を失ったり、直接的な言葉や態度に表さなくても非難をされているような気分になり、授業が苦痛と感じる様子が見受けられる。

前期はグループワークに慣れていないため、各グループに積極的な授業態度の学生が2名以上入る形で組み合わせている。後期はグループワークの流れや方法が身についてきているので、くじ引きを中心に編成している。バランスが悪い場合は、教員が適宜議論に参加し一部サポートをする。時には積極的な学生同士、消極的な学生同士でのグループ編成も行う。積極的な授業態度の学生のグループは滞りなく議論が進む。消極的な授業態度の学生たちのグループは、積極的な授業態度の学生に物怖じせずとも良いので、議論に能動的に参加できた。というケースもあれば、議論以前に意見さえも出さず、教員の全面的なサポートなしには進行できなかったケースもあった。

グループ内で起きた葛藤を活用しながら、人間関係や協調性についても学ぶのが理想的だが、学生各々の能力

や性格はもちろん、学年による雰囲気の違い、個人的な人間関係の影響等も関係してくるため、それらを鑑みたうえで、どのような仕掛けや指導が効果的か模索中である

②授業展開について

次年度のソーシャルワーク実習では、実習現場でケース研究を行う。授業でのペーパーシュミレーションによる研究よりも、直接ケース対象者と面接ができたり、記録物も閲覧できるうえ職員からも情報を得ることができるのだから、授業よりもスムーズにこなせるよう思われるのだが、ケース対象者の全体像の理解が浅く、生活の因果関係にも思いが至らず苦戦している様子をしばしば目にする。授業のグループワークでは、鋭い気づきや洞

察力のもと考察ができているのだが、一人になった時にそれらの能力が発揮できなくなっている。

その理由として、授業展開においてお膳立てをしすぎているため、段取りを組んで考えていく力や、着眼点が養われなかった可能性があると思いついた。今後は、事例検討の流れや方法が大枠で理解できる段階に至ったら、学生主体で演習課題に取り組ませ、教員は側面的なサポートに徹する方法を試みたい。

参考引用文献

ソーシャルワーク演習教材開発研究会「ソーシャルワーク演習ワークブック 第2版」みらい（2013）

Social work I can put it for the practice class of the case study

SAKURAI Mihoko

Abstract

Social work I can put it for the practice it was based on knowledge and the ethic that I learned understand it through support subject of connect to the next training exchanging opinions and discussing in groups by simulating each other being able to see things different one way to know yourself an opportunity to learn teamwork there are students who are not good at group work you can not learn unless you actively participate among them because case studies are exciting based on class development and student reactions discuss learning methods.